台大日本語文研究第 5 期
2003 年 12 月，頁 83～112

對提喻分類法之認知意義論研究

謝豐地 正枝*

摘　要

關於將某種比喻表現基於何種理論基礎分類爲提喻或換喻，在本論文中，與主要比喻表現相關的各種理論、學說，言明依據各別理論的理論性證據之後分析研究的結果，明確指出贊同佐藤學說、楠見學說的立場。又，將依據提喻的「花」和「桜」間存在之意義關係形成的「花は桜だ」這種提喻表現之概念，以印象略圖（image schema）來表示。此外，將「花は桜だ」這種以提喻表現的概念，形成「花は桜吹雪だ」這種新概念而向隱喻表現轉變的變化過程，以佐藤說、楠見說及認知意義論的觀點來研究，並明確地以表顯示。結論指出，提喻與換喻，或提喻與隱喻，即使沒有完全的意義關係，在意義性關係上亦可找出連續的可能性。

關鍵詞：提喻、換喻、印象略圖（image schema）、包攝關係、
意義構造

* 國立臺灣大學日本語文學系副教授

臺灣大學學術期刊資料庫

A Cognitive Linguistic Analysis of Major Theories Applied on Metaphorical Issues Resulting from Synecdoche's Distinction from Metonymy

Masae Toyochi Hsieh*

Abstract

This study intends to analyze and provide comparative discussion of similarities and differences of definitions,theories and paradigms as presented by major linguists including R. Jakobson, the Group Ц, G. Lakoff, E.Kittay, Nakamura, Sato, and Kusumi. Moreover, this research analyzes whether a certain metaphorical expression should be classified as synecdoche or as metonymy, and analyzes in depth the Group Ц's theory which advocates that synecdoche forms the fundamental basis for other metaphorical expressions including metaphor and metonymy.

The Group Ц's theory identifies two different types of synecdoche—Π type and Σ type. However, upon examining the Group Ц's theory, shortcomings become evident, in particular being unable to clarify the theoretical reasons for Π type classification as synecdoche. Based on both the Sato's theory and Kusumi's theory, the Π type should be classified as metonymy, and this study supports their theories of classifying the Π type synecdoche as metonymy.

Prior to conclusive statements, a detailed comparative analysis is presented on the differences of semantic structures supporting "part－whole" relationship as shown in one pair forming synecdoche and the

* Associate Professor of Dept. of Japanese Language and Literature, National Taiwan University.

臺灣大學學術期刊資料庫

other pair forming metonymy. Conclusions propose that metonymic shifts of meaning can occur between words which have either paradigmatic or syntagmatic relationships. Synecdoche, -- a type of metonymic transfer, supported by semantic relationship of taxonomy in semantic field -- involves the paradigmatic relation of "part-whole." Yet metonymy, is supported by the relationship of "part-whole" considered as hyponymy. Moreover, this study observes how one pair forming synecdoche expression shifts its meaning and forms into a new metaphorical expression, and thus concludes that synecdoche may also involve moving from one semantic field to another, such as the field of metaphor occuring by means of some polysemy on the part of the word which serves as a bridge.

Key words: synecdoche, metonymy, image schema, hyponymy, semantic structure

臺灣大學學術期刊資料庫

シネクドキの分類法に対する認知意味論的考察

謝豊地 正枝*

要 旨

本稿では、主な比喩表現に係わる各種の理論や諸説が、ある比喩表現をどのような理論的な根拠に基づいて、シネクドキ、或いは、メトニミーとして分類するかについて、それぞれの理論による理論的な根拠を明らかにした上で比較分析・考察した結果、佐藤説・楠見説に同意する立場を明確にした。そして、シネクドキを形成する「花」と「桜」との間に存在する意味関係によって形成されている「花は桜だ」というシネクドキ表現による概念をイメージスキーマとして捉えて、図を試作して表示した。また、「花は桜だ」というシネクドキによって表示される概念が、「花は桜吹雪だ」という新しい概念を形成してメタファー表現に変化する変化過程を、佐藤説・楠見説及び認知意味論的な見地に基づいて考察し、表として示した。結論として、シネクドキとメトニミーとが、或いは、シネクドキとメタファーとが、全ての意味関係ではないかも知れないとしても、意味的な関係において連続している可能性が見出せた点について指摘し、まとめとした。

キーワード：シネクドキ、メトニミー、イメージスキーマ、
包摂関係、意味構造

臺灣大學學術期刊資料庫

*台湾大学日本語文学系副教授

シネクドキの分類法に対する認知意味論的考察

謝豊地 正枝

一、本稿のテーマ及び研究方法

本稿のテーマは比喩表現の一種であるシネクドキに対する異なる分類方法の理論的根拠に関して主に認知意味論的なアプローチを用いて分析・考察することである。

二、シネクドキに係わる諸理論に対する考察

（一）カテゴリ的意味の包摂関係によるシネクドキの形成について

比喩表現の主なものには、シミリ（直喩）、メタファー（隠喩）、メトニミー（換喩）、シネクドキ（提喩）などがある。
それらの表現の差異を文例によって【表 １】に示す。

【表 １】 主な比喩表現法による文表現の差異

比喩表現法	文表現
直喩	（1）彼女は牡丹の花のようだ。
メタファー	（2）彼女は牡丹の花だ。
メトニミー	（3）牡丹の花模様のだらりの帯が歩いて来る。
シネクドキ	（4）中国画の花の図案は牡丹の花（の図案）がいい。

において、（４）文はシネクドキ表現で、「中国画の花の図案の中では、牡丹の花（の図案）が最も美しい」という意味を表現している。「中国画の花の図案」が「全体」を表現して、「牡丹の花（の図案）」がその「一部分」を表現している意味関係にあるからである。この場合、「中国画の花の図案」と「牡丹の花（の図案）」とが形成する意味関係は「包摂関係」に基づいている。これに対して、(3) 文に

臺灣大學學術期刊資料庫

おける「(牡丹の花模様のある) だらりの帯」とは、それを所有して着ている舞妓を指していて、「(着物を着てだらりの帯を締めた) 舞妓」が「全体」の意味を成しており、「(牡丹の花模様のある) だらりの帯」はその舞妓全体の「一部分」である。したがって、「部分」によって「全体」を指すメトニミーを形成している。この場合の「部分―全体」が形成する意味的な関係は「包含関係」である。

シネクドキに対するヤコーブソン説の見解には、柔軟性が見出せる。例えば、比喩を形成する二項が「全体―部分」の意味関係を示す際に、ある状況下においては、それら二項の関係が「メトニミーとシネクドキの境界線上にある」と指摘する。そして、ある文脈において用いられた比喩的表現がメトニミーであるか、シネクドキであるかに関しては、言語主体の指示対象に対する「視点の差異」に関係しており、それぞれの状況によって異なる解釈法が存在するとみなす。そして、ある比喩表現がメトニミーかシネクドキかのどちらであるかを判断するのに決定的な根拠として、ある言語主体によって「象徴的」に用いられた二項間の意味関係によって表示される時間的配列が、「転位的な概念を示すメトニミーな隣接性」に基づいているのか、或いは、「圧縮的な概念を示すシネクドキ的な隣接性」に基づいているのか、若しくは、単に「同一化」・「象徴化」に基づいているのか、に係わっていると指摘する。[1]

これに対して、レイコフ説ではシネクドキは「死喩」であり、メトニミーの一種であるとみなす。[2] また、クーパー説では、シネクドキはメタファーとして生き残りながら死喩になっていくものもあり、慣用句へと変化して生き延びるものも存在すると主張する。[3] 日本においては、シネクドキはメトニミーの一種であるとの見方が強

[1] R.ヤコーブソン『一般言語学』1973 年、川本茂雄ら訳、みすず書房、p .210、p.221-p.222。
[2] G. レイコフ・M.ジョンソン『レトリックと人生』1999 年 (増補版)、池上嘉彦ら訳、紀伊国屋書店、p.91-p.108。
[3] David Cooper *Metaphor: Aristotelian Society Vol.5*, 1986, Basil Blackwell, Oxford, Great Britain, p.118-p.127.

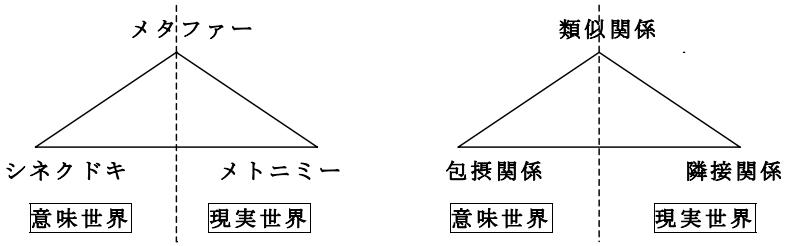
臺灣大學學術期刊資料庫

く、中村明説ではシネクドキをメトニミーから離すのは容易ではないとの見解を示す。[4]

メタファー、メトニミー、シネクドキの三種類の比喩表現を「認識の三角形」図を用いて示し、更にそれぞれの比喩表現に対応する意味関係を「意味関係の三角形」として比較表示したのは、瀬戸説である。[5]

【図　1】

「認識の三角形」図及びそれに対応する「意味関係の三角形」図



一方、楠見説はそれらの比喩表現に対応する意味関係を、比喩の処理過程に関する実験結果に基づいて、【表　2】のように分類する。

【表　2】　楠見説によるシネクドキの分類法に対する理論的根拠表

比喩表現	比喩表現の基礎となる意味関係
シネクドキ	カテゴリ的意味の包含関係に依拠
メトニミー	スクリプト的意味の隣接関係に依拠
共感覚的比喩	情緒・感覚的意味の類似関係に依拠
直喩・隠喩	上記の三つの意味による三つの関係に依拠

楠見説は直喩・隠喩処理には、スクリプト的意味が加わることがあることを発見し、「その場合には、メトニミー処理過程と共通性を

[4] 中村明『比喩表現の理論と分類』1952 年、国立国語研究所、p.33。
[5] 瀬戸賢一『認識のレトリック』海鳴社、1997 年、p.194-p.201。

臺灣大學學術期刊資料庫

もつことになる」点を指摘した。[6] この解析に基づいて楠見説は、瀬戸説の「認識の三角形」による提案に対して以下の三点の修正案を提示している。その三点とは、（１）“現実世界”、“意味世界”に“情緒・感覚世界”を加えること、（２）それぞれの“世界”を表象した知識内の意味構造として、「現実世界」に「スクリプト的意味」を、「意味世界」に「カテゴリ的意味」を、「情緒・感覚世界」に「情緒・感覚的意味」を対応させること、（３）直喩・隠喩処理は三つの意味世界と意味関係、すなわち【多重意味構造】に依拠することを想定すること、の三点である。

関連して、楠見説はシネクドキが“意味世界”における推論に依拠している点を強調する。そして、シネクドキには、「特殊化方向の推論（カテゴリ名で典型性の高い事例を示す：花→桜）と、それとは逆に、一般化方向の推論（典型事例でカテゴリを表す：パン→食物）が働いている」という、二つの推論が関わっているとの見方を示す。そして、「花」と「桜」とがシネクドキ関係にある時は「一義性」であるとの条件を付加している。この点について、「直喩・隠喩における【主題―喩える語】間の一義性は、喚喩・提喩に比べると低い」と見なす。[7] 従って、シネクドキは意味世界および情緒・感覚世界の二領域に深く関わり合っていること、一義性が高いことなどをシネクドキの特性として指摘しているのである。

（二） 比喩のシネクドキ基本説および「シネクドキ二種類説」に対する考察

グループμは、楠見説によるシネクドキ論には反対の立場に立って、シネクドキにはΠ型のものと、Σ型のもの、の二種類があると主張する。本稿では、以下、グループμによるこの説を「シネクドキ二種類説」と仮称して論旨を進める。

（5）林さんは髪が長い。

[6] 楠見孝『比喩の処理過程と意味構造』1995 年、風間書房、p .170- p .206。
[7] 楠見孝『前掲書』、p .186。

臺灣大學學術期刊資料庫

において、Π型のものでは、メロニミー関係を示す「林さん＝頭と胴体と腕と脚と顔と髪と･･･」を分解する。命題である「Ｘは人間である」と「Ｘは頭を有する」と「Ｘは胴体を有する」と「Ｘは腕を有する」･･･「林さんは髪を有する」等の諸命題の積との間に等価性がある。このような分解法を『配分的（distributive)』とみなす原因は、全体の意味素が部分部分に不均等に配分されているからである。分解法は配分的であり、知覚的に分解されている。[8] 以上のグループμによる「シネクドキ二種類説」の理論的な根拠に基づけば、上記の（5）文例、並びに、下記の文例、

（6）あのバスは窓が大きい。

における「Ｘ」と「Ｙ」とが形成する意味的な関係は、いずれの関係もΠ型のものであると見なされよう。

これに対して、木の概念を上位レベル（認知言語学的に言えば『基本レベル』）に位置するものとみなして、下位レベルで互換性のある下位概念が位置しているとみなす分解法がある。それぞれの木は個体であり、下位レベルのいずれかの種類の木に属している。木という「類」の下では、それぞれの桜、松、杉などは排他的な型の分離、若しくは「和」を形成していることが見いだされる。「ｘは木である」＝「ｘは桜である」あるいは「ｘは松である」あるいは「ｘは杉である」あるいは･･･という分解法を示す。この場合は、分解法は『属詞的（attributive)』であり、概念・論理的に分解されている。そして、木全体はそれぞれ排他的な型の部分同士の論理的「和」で構成されている総体なので、Σ様式型のものと分類される。この分解法によるΣ様式の『全体―部分』の意味関係は、類と種の関係であると同時に、概念の外延的意味としての『全体―部分』を含む包含関係」を示すシネクドキの意味構造である。これはメトニミーに還元できない。 以上の理論的な背景に基づいて、グループμは、

[8] グループ Ш『一般修辞学』1996 年、大修館書店、ｐ.195。

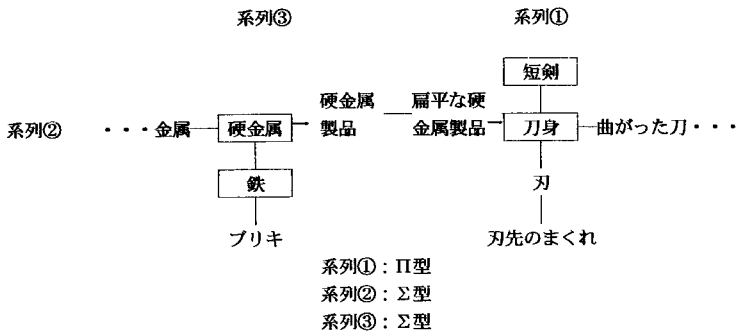
臺灣大學學術期刊資料庫

【図 2】のシネクドキ的連鎖の仮説的図式を提案している。[9] 【図2】に基づくと、

(7) 花は桜がいい。

における「X (「花」)」と「Y (「桜」)」とが形成する意味関係は、シネクドキΣ型であると判断できよう。

【図 14】 グループμによるシネクドキ的連鎖の仮説的図式



「語」に対する「シネクドキ二種類説」による分解法に依拠すると、Π型に基づけば、「外心的指示系列」に沿って「林さん→髪」を作ることができる。これに対して、Σ型に基づけば「内心的意味系列」に沿って「花→桜」「桜→花」を作ることができる。この意味は、グループμによる理論に依拠した場合、(5) 文の「林さんは髪が長い」に対する分解方法と、(7) の文の「花は桜がいい」に対する分解方法の相違は明白である。しかし、それぞれの文に対する分解方法が異なる理論的な根拠については、グループμ説では明確に解説されてはいない。

この分解方法の相違が発生した理論的な根拠について考察すると、(5)「林さんは髪が長い」文と (7)「花は桜がいい」文との統語論

[9] グループμ『前掲書』、p.206。

臺灣大學學術期刊資料庫

に基づいた文法的な文構造にあるのではない。なぜならば、これら二文例の示すそれぞれの統語論的なレベルでの文構造を形成する品詞配列は「Ｘ＋Ｙ＋形容詞」であり、全く同一であるからである。分解方法の差異が生じた根拠は、それぞれの文例に対応する意味構造の相違にあるものと考える外、他に適格な根拠となる文保的な要素が存在しないケースであろう。就中、これらの二構文を支えるそれぞれの意味構造は、それぞれの文における主題の派生プロセスの相違にも直接的に関連しているものと考えられるのである。

第一に、シネクドキ二種類説の主張するΠ型（解剖型）による分類方式、及び、Σ型（概念型）による分類方式の差異に関して比較すると、次のように示すことができる。

シネクドキ（提喩）を構成する「解剖型」と「概念型」の分類法

Π型（解剖型）の分類方式

ｉ.車:[車体、ヘッド･ライト、ハンドル、ブレーキ、シート、. . .]

ii. 木：[幹、根、枝、葉、．．．]

Σ型（概念型）の分類方式

ｉ．哺乳動物：[鯨、馬、犬、猫、．．．]

ii. 木：[松、杉、檜、桜、．．．]

次に、解剖型と概念型は二つの指示対象となる語彙間の意味関係が、「全体―部分」か「部分―全体」か、いずれかのタイプを表すかによって、更に二つの類型に下位分類できる。それをまとめて下に示す。この表に基づくと、【花―桜】の意味関係は、概念的Σ型の「特殊化」という類型であることが分かる。

シネクドキ（提喩）の類型

［１］解剖的Π型[一般化]:[例：校門→学校]

［２］解剖的Π型[特殊化]:[例：乱れ髪→女性]

［３］概念的Σ型[一般化]:[例：鉄砲→凶器]

［４］概念的Σ型[特殊化]:[例：花→桜]

臺灣大學學術期刊資料庫

関連して、包摂関係に基づくΣ型のタイプについて考察すると、同一の「語」を、情況によって、Π型に基づいてもΣ型に基づいても分解することが可能である。この外に、Σ型のタイプは分解操作をする際には、論理的「積」の方式をとることも「和」の方式をとることもできる。しかし、包含関係を示す「Π型」のタイプはそのように二通りの分解操作ができない。単に論理的「積」の方式をとることができるのみである点が見出される。

加えて、シネクドキとメトニミーとの相違は、実際的に比喩を運用する場合にシネクドキはメタファー的な表現とを兼ね合わせることが出来る点にも見出すことが出来る。例えば、

（8）黄金は鉄の下に崩れ落ちる。

というサン・タマン（Saint-Amant）の表現は、「鉄製の武器ではなく農具こそが黄金の価値がある」という意味をシネクドキとして表現したものである。この表現には、「提喩(シネクドキ)の中に淡い隠喩(メタファー)的色あい」が見られる。[10] このように二つの比喩が重ね合って一つの比喩表現を具現化できることは、メトニミー表現にはあまり見出されず、シネクドキの特性が表面化したものと考えられる。

しかし、グループμによる「シネクドキ二種類説」は、どのような理由によって「Π型」のタイプが、「Σ型」が示すような二通りの分解操作ができないという、操作レベルにおける相違の発生に関する理論的な根拠を明らかにしてはいない。それ故、この相違がどんな根拠に基づいて発生するかという原因について考えると、包摂関係を示すタキソノミーにおける上位レベルに位置する上位カテゴリの概念と下位カテゴリの概念との意味的な結びつき方と、包含関係を示すパートノミーにおける上位･下位に位置する概念との結びつき方の相違に依拠しているものと考えられる。すなわち、上位に位置する概念と下位に位置する概念は、包摂関係を示す上･下階層を飛

[10] グループμ『前掲書』、p.244。

臺灣大學學術期刊資料庫

び越えて結びつくことができる。その意味は、どのレベルの上位カテゴリの概念でも、どのレベルに位置する下位カテゴリの概念を包摂することができる上に、「逆も真なり」の関係を示す。その条件下にある二つの概念の間に起こる「結合」は、位置する包摂を示すレベルが異なってさえいれば、結びつき方に関してはなんらの制限を受けない。これは比喩表現を形成する抽象的な意味概念同士の「包摂的な結合」であることに基づいているからである。

これに対して包含関係である「パートノミー」の関係にある二つの概念は、一方が直ぐ上位レベルに位置しているか、或いは、直ぐしたの下位レベルに位置していなければ、結合することができない場合も生ずる。下記の二文例はその結合法の相違を示す。

（9）松は植物の一つである。

（10）＊ 爪は腕の部分である。

において、（9）文中の「松」と「植物」という二概念が示すシネクドキ的結びつき方と、（10）文中の「爪」と「腕」という二概念が示すメトニミー的な結びつき方とは、必ずしも一致しない場合もある点を示す。二文中のそれぞれの二概念による結びつき方に見出される決定的な差異は、シネクドキを形成する二項による結びつき方は意味世界におけるカテゴリ的な結びつき方である点である。他方、メトニミーを形成する二項による結びつき方は、意味世界におけるカテゴリ的な結びつき方ではなく、実際の具体的な固物体を表す意味概念による結びつき方だという点にあるものと考えられるのである。しかし、グループμによる理論によれば、上記のパートノミーに基づいた包含的な意味関係と意味構造に支えられたメトニミー的な比喩表現も、シネクドキの一種と見なす立場をとるのである。

（三）シネクドキのメトニミーからの分離・独立説

佐藤信夫説は、本質的には、シネクドキとメタファー（隠喩）とは語句の意味的な類似性に基づく比喩であるという点において共通であるとの観点に立つ。佐藤説の立場に立つならば、メトニミーとは現実的な共存性に基づく比喩であるから、シネクドキとは根本的

臺灣大學學術期刊資料庫

には対立せざるを得ない。加えて、佐藤説は、「シネクドキ二種類説」は正しくないとみなす。そして、「シネクドキ二種類説」の根本的な間違いの原因は、Π型様式の分解法が意味的な側面を指すのではないにもかかわらず、グループμが「現実の木の分解」と「木の意味の分解」とを混同している点にあると指摘する。グループμによるΠ型様式は現実に存在する物体の構造の分解であって、意味的な側面の分解ではないと佐藤説はみなす。そして、Π型様式における「全体―部分」は現実的な物理的な測定では「大＝小」、「含有＝被含有」の関係を示すが、それぞれの個々の部分は概念、若しくは、意味の上では対等である筈だと主張する。[11]

グループμはΠ型様式を形成している個々の部分と全体との関係は、「不均等」的に分割されていると見る。しかし、佐藤説は、Π型の分割法とは、意味的な面をふくまない実際の固物体の分解であるにもかかわらず、グループμが意味的な側面を含むものと誤解しているのだと指摘する。更に、意味の上では、Π型様式における「全体ー部分」とは「隣接して共存している」という点で「均等」の関係にあるものを、グループμが「それぞれの『部分』は不均等の関係によって『全体』に結ばれている」との見解を示しているのは間違っていると正している。「固体に対する実際的な分割法」をもとにしてそれをグループμは意味的な領域にまで無理に拡張させていると指摘する。果たして佐藤説の批判は全て正しいのであろうか。

グループμの観点について、認知意味論的なプロトタイプ論に基づいて考察するならば、全体の概念を構成するそれぞれの成員の中には、プロトタイプも周辺的な意味特徴を示す成員も含まれているのであるから、その状態は「部分部分の意味素が不均等に配分されている」状態に相当するとも見られないことはない。加えて、同じ言語主体によって一つの「語」が発話されても、その「語」の指示対象となる概念が変化すれば、その概念上の変化に伴って別の語義

臺灣大學學術期刊資料庫

[11] 佐藤信夫『レトリック感覚』1978年、講談社学術文庫、p.183―p.192。

を示すという多義構造を示す「異なる比喩表現への転換とそれを支える意味構造上の変化」が見出だされる。多義的別義が複数に上ると仮定して、それぞれの個々の多義的概念が意味的な連続体をなしている場合には、佐藤説の立脚している古典的な意味論の観点によって言語現象の全てを説明することが可能であろうか。現段階では、グループμはプロトタイプ論に対する独自の見解を明確にしていない故、グループμ説と佐藤説の対立に関する理論的な相違に対する判定は今後の課題とも言うべき問題であろう。

語の概念について考えれば、その概念には外延と内包という二つの側面がある。外延とはΣ様式の全体としての《桜》の概念が存在することであり、それに対して「桜」の内包は、ある存在物を桜として認めるための「基準となるような性質、資格条件を集めたもの」であり、その集積が、π様式による全体としての《桜》という概念である。Σ的全体（外延）とπ的全体（内包）は表裏一体の関係にあり、一方が決まってくれば、他方もそれにつれて決まってくる。以上の立場に基づいて、佐藤説は【表　3】に示されるような修正説を提案している。[12]

【表　3】　「シネクドキ二種類説」に対する佐藤説による修正表

Π型	**外心的指示系列**	**それぞれの部分の論理的「積（プロデュイ）」によって構成されている総体**
Σ型	**内心的意味系列**	**それぞれの部分同士の論理的「和（ソム）」で構成されている総体＝外延的意味関係**
π型	**内心的意味系列**	**それぞれの意味素によって論理的「和（ソム）」で構成されている総体＝全体という概念に含まれるべき属性の総体＝内包的意味関係**

【表　3】に基づいて、佐藤説は、グループμの主張するシネクドキのΠ型はシネクドキの一種ではなくて、メトニミーに分類される

[12] 佐藤信夫『前掲書』、p.179-p.188。

臺灣大學學術期刊資料庫

べきだと結論づけている。そして、現実的な隣接性であるΠ型の「全体―部分」に関する比喩は全てメトニミーであり、Σ型およびそれと表裏一体であるπ型の「全体―部分」は、現実的な隣接性を伴わず「類と種」の関係であるからシネクドキであると指摘している。佐藤説に従えば、「林さんは髪が長い」構文はメトニミーとして分類されるべきで、「桜は花がいい」構文はシネクドキとして分類されるわけになり、本稿もこの観点に同意する。

関連して、シネクドキとメトニミー間の分類上の問題は、根本的には、「隣接性」についてどのように定義し、解釈するかにある。しかし、隣接性がすべてのメトニミーを説明できるかどうかに対する懐疑論もないわけではない。従来の「隣接性」に対する定義に批判的な立場にある芝原説は、【メトニミー関係の仮説】として、「メトニミー関係は、すべて、連結関係である。」という仮説を提案している。その仮説を【表 4】に示す。それによると、芝原説が基本的には「隣接性とは、連結関係だ」と見なしている点が見出される。[13]

【表 4】　「芝原説による論証」

a．xとyはともにzと鋭く対立するという点で似ている。
b．xとyはともにzとしては扱えないという点で似ている。
c．xとyはともにzと違うという点で似ている。

芝原説は【表 4】による論証によって、隣接性以外のメトニミー関係が隣接性に直接似たものになることを示した。【表 4】に基づくと、隣接性以外のメトニミー関係が隣接性に似てくるのが明らかになる。但し、芝原説はシネクドキの隣接性には触れてはいない点を指摘しておきたい。例えば、「隣接性とは、連結関係だ」とみなしている芝原説の観点に基づけば、シネクドキは「連結関係」に基づ

[13] 芝原宏治『錯誤の意味論』1995 年、海鳴社、p.110―p.115。

臺灣大學學術期刊資料庫

いて成立している意味関係であるということになる。それ故に、芝原説の仮説に基づいて、シネクドキの意味構造を支える、「意味世界における意味的なカテゴリレベルにおいての結合による隣接性」、及び、「メトニミーの意味構造を支える現実の外界に存在する物体を仲立ちとした結合による隣接性」との間に見出だされる【結合の質的な相違】に関して説明するのは難しいと思われる。

以上、シネクドキとメトニミーの分類上の問題に対して分析・考察し、その問題に関わっている理論的な対立点と原因について明らかにし、シネクドキの比喩表現としての特性を明らかにした。

（四）まとめ

第四章においてシネクドキおよびメトニミーとの定義上の相違に対して分析・考察した結果、下記の文例における「X」と「Y」とが形成する意味的な関係を明らかにする。

（11）　花は桜がいい。　　【再掲】

（12）　林さんは髪が短い。　　【再掲】

（13）　あの茶髪は背が高い。

（14）　あの茶髪は感じが自然だ。

のそれぞれの文例中の「X」と「Y」とが形成する意味関係について、本稿の立場は次の通りである。

【１】（11）文例における「花」と「桜」とは外延的意味関係を示している「Σ型」であり、「桜」を含むそれぞれの部分同士の論理的「和（ソム）」によって「花」という概念を構成している。そして、「類」と「種」という意味的な包摂関係に基づいたシネクドキであると分類する。

【２】（12）文例における「林さん」と「髪」とは、外心的指示系列として、「髪」を含むそれぞれの部分の論理的「積（プロデュイ）」によって「林さん」が構成されている。この意味的な関係はグループμの指摘する「Π型」のシネクドキに相当するが、本稿では「林さん」と「髪」との関係がイメージおよび連想という意味世界に属していない概念同士の形成する意味関係であることに基づいて、現

臺灣大學學術期刊資料庫

段階では「全体」と「部分」という意味的な包含関係に基づいたメトニミーであると解釈せざるを得ない。

【３】（13）文例における「あの茶髪」と「背が高い（人）」とは、内包的意味関係を示す。内心的意味系列としては、「茶髪」を含むそれぞれの意味素の論理的「和（ソム）」によって「背が高い（人）」が総体として構成されている。「あの茶髪」と「背が高い（人）」とが形成する意味的な関係は、佐藤信夫説による「π型」であり、発話状況および話し手の視点によって、シネクドキともメトニミーとも判断できる両比喩表現の間の境界線上に位置するものと解釈する。

【４】（14）文例における「茶髪」と「感じ」との意味関係は、髪の「色」に焦点が置かれて、色という「類」に属する「茶（髪）」という意味で発話されている場合であればシネクドキ表現である。これに対して、「茶髪」と「感じ」との意味関係が、髪の「スタイル」に焦点が置かれていて、「スタイル」という「【類】を表す全体」に対して「茶髪によるスタイルの【一種】」である、という意味で発話されている場合は、シネクドキ表現であると判断できるよう。しかし、「感じ」という意味が「茶髪をしている人全体の感じ」を表現している場合には、「茶髪」と「感じ」との意味関係は上記の【３】に準じた関係を形成しているという解釈も成り立つものとみなすことができよう。このように、「全体―部分」を表現する意味関係によって支えられるメトニミーとシネクドキの間には、明確な境界線を引くことが難しく、本稿では、二者は連続している可能性がある点を指摘しておきたい。

三、シネクドキ表現を表すイメージスキーマの試作

（一）「Ｘ」と「Ｙ」とが形成する意味関係に対する考察

まず、主な「ＸはＹが＋述語形容詞」構文を示し、それぞれの「構文」中の「Ｘは」と「Ｙが」とが形成する意味的な関係を併記する。

（15）花は桜がいい。【再掲】

【「全体と類」、或いは「集合とメンバー」】

臺灣大學學術期刊資料庫

（16）林さんは髪が長い。【再掲】　　【全体と部分（固体）】
（17）日本は温泉が多い。　　【所在地点と状態の特徴】
（18）A先生は本が少ない。　　【所有者と所有物】
（19）伊藤さんは息子さんが賢い。　　【主体と帰属者（親族）】
（20）加藤さんは性格が優しい。　　【主体と属性（性格）】
（21）佐藤さんは頭がいい。
【主体と属性（能力―形容詞句が慣用的表現を示すもの）
（22）テーブルは角が丸い。　　【主体と属性（状態）】
（23）独り者は夜が寂しい。　　【主体と心的状態】
（24）今日は風が強い。
【主体と属性（発話主体が知覚できるもの）】
（25）手術は後が痛い。　　【原因・前提と結果】

において、「X」と「Y」とが示す「主体と属性」の関係にも、さまざまな種類のものがあることが分かる。(25) 文例以外の構文における「X」「Y」とは「全体―結果」で表される意味関係にある。そして、この意味関係は「包摂関係」を示していることが見出される。

（二）「花」と「桜」とが形成する包摂関係を表すイメージスキーマの試作

イメージとは、心的表象の一種であって、日常的な経験に基づいて形成される。我々人間はイメージを通して外の世界の対象を把握する。そして、抽象的な対象に直面した時には、状況に応じて既にもっているイメージを拡張させその拡張させたイメージを介して理解する。そのような創造的な理解には、少なくとも、(1) ある対象に対して具体的なイメージを作り上げていくプロセス、(2) ある対象のイメージを他の対象に拡張していくプロセス、(3) ある対象のイメージを多角的な視点から組み替えていくプロセス、の三種の認知プロセスが関わっている。我々は、このようにして形成されたイメージとこのイメージに関わる具体的な知識を背景にして、イメー

臺灣大學學術期刊資料庫

ジスキーマを作り上げている。[14]

スキーマに対する解釈にも異なるものがある。[15] スキーマの構造体は我々人間の経験を組織化する行為であり、動作・行為のパターンを示すのみならず、動作・行為を実際に行うためのパターンを示すものである。しかし、スキーマは視覚によって知覚できる領域に限られてはいない。抽象的な領域においても充分活用できるものなのである。典型的なスキーマの構造体は「意味的な部分と意味的な関係」によって形成される。それらの「部分」の属する主なものには、「人々、仲間、行事、状態、原因、目標」などを含む。これに対して「関係」に属するものには、「単純な関係、普通の関係、暫定的な連続しているものの一連の関係、部分―全体、相対的な地点、動作主―被動作主、道具を仲立ちにした関係」などが含まれる。[16]

スキーマは人間の情報処理メカニズムの引導的な機能をもつ。[17] ラネカーのイメージスキーマ理論では、スキーマとは二つの概念をＡ、Ｂで表した場合に、ＡがＢによって示される特定的な要素と一致しているが細部の精密度にはそれほど対応していない時に、ＡとＢとはスキーマを形成する関係にあると見る。そして、この場合のＡＢの関係は、例えば、Ａがタキソノミーの上位レベルに位置していて、Ｂが下位レベルに位置しているという意味的な関係と同価値にあるものに相当するとみなす。[18]

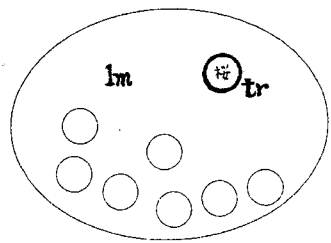
イメージスキーマ理論では推移状態にあるものでもイメージスキーマによって表すことができる。イメージスキーマの典型的な例としては、(1) ＜容器＞のスキーマ、(2) ＜上・下＞のスキーマ、(3) ＜前・後のスキーマ＞、(4) ＜中心・周辺＞スキーマなどがある。レイコフの指摘によると、例えば、(3) のスキーマは我々人間の身

[14] 山梨正明『認知文法論』1995 年、ひつじ書房、p.95－p.96。
[15] Mark Johnson *The Body in Mind－The bodily basis of Meaning, Imagination, and Reason,* 1987,Chicago University Press, p.21.
[16] Mark Johnson *Ibid.,* 1987、p、25-p.28.
[17] D. Rumelhandt “Notes on a Schema for Stories” 1989, A.M.Collins, eds. *Representation and Understanding: Studies in Cognitive Science*, New York Academic Press, p.211-p.236.
[18] G.レイコフ『認知意味論』1999 年(増補版) 紀伊国屋書店、p.331-p.355.

臺灣大學學術期刊資料庫

体的特徴に基づいて「前後・左右の概念」が形成されていることに依拠している。[19] また、「Ｘは Ｙが Ｚ」構文に対しては、容器のスキーマと抽象的な空間領域への参与者（participant）の関係から一般的に規定されているとみなされている。[20] 「花は桜がいい」構文中の「Ｘは」と「Ｙが」とは「集合―メンバー」或いは「全体―部分」という意味関係を形成しているので、全体を＜容器＞と捉えて部分を＜容器の内側にあるもの、或いは容器の一部を成すもの＞と捉えられる。或いは、クック説に従えば、「桜」は「花によって表される概念領域への参与者」として捉えることができる。そうすれば、「花」と「桜」によって形成される包摂関係のイメージスキーマを、「＜容器＞のスキーマ」として筆者が試作したものを、【図　３】として示す。図は、「花」は＜集合＞の概念を表していて、その概念によって支配される「意味領域の範囲」の表示、及び、「桜」を包摂している領域として機能していること、の二点を示している。

【図　１５】　**「花」と「桜」による包摂関係のイメージスキーマの試作図**



【図　３】において、「lm」はランドマークで「花」という「類」

19 G.レイコフ『前掲書』1999 年、p.360-p.365。
20 Haruko Cook “Schematic Values of the Japanese Nominal Particles WA and GA in R.A.Geiger & B.Rudka －Ostyn eds., *Topics in Cognitive Linguistics*, 1993、p.371－p.397.

臺灣大學學術期刊資料庫

を表している。このランドマークは同時にイメージスキーマの「背景（地の概念)」を表現している。そして、大きい円によって囲まれているスペースは「花」の支配する意味領域を示す。大きい円は「花」の概念を＜全体＞を意味するとして＜容器＞に見立てて描かれている。「花」の概念のカテゴリは抽象的な概念なので、領域は暗く描かれていない。（具象的な物体の場合は、意味領域は通常暗く描かれる。）円は「花」の下位カテゴリを示すそれぞれ「桜、チューリップ、カトレア、バラ、水仙、・・・」などの花の「種」のイメージである。円が連続しているのは種としての「集団を構成するメンバー」としてのイメージを表す。右上に一つ離れている円は「**tr**」で表され、トラジェクターと呼ばれる。「**tr**」は、「前景（図の概念)」を意味表現している「桜」を表す。「桜」は＜全体―部分＞という意味関係から、「最もいいもの」と評価されて選び出されているが、「地」を表現している「花」の類の外へは出ていない。【図 3】は、集団を構成するメンバー（例えば「桜」）が集団から一つ選ばれても、「花」との包摂関係に基づいて「花」の概念をイメージする＜容器＞の外へは出ないで、「花」の概念との意味的な包摂関係を保っている状態を示しているのである。

（三）「花」と「桜」によるシネクドキの形成における認知過程に対する考察

「花は桜がいい」における「花」と「桜」とは、それぞれの異なる二つの概念の間に存在する包摂関係に基づいてシネクドキを形成する。そして、その意味構造はΣ型およびπ型の概念を合わせた総体である。「花は桜だ」というシネクドキ表現の形成における認知プロセスに関して考察すると、「花」と「桜」とが文を成立させて「花は桜だ」と表現する時には、第一に、選択制限の違反の認定が重要な役割をもつ。選択制限の違反の有無は、「花は桜だ」がシネクドキ表現として成り立つ条件の一つであるため重要なのである。その選択制限の違反について認定するためには、まず、「花」の基本的な意味的な内容を特徴づける部分を中核概念として抽出する。中核概念

臺灣大學學術期刊資料庫

とは「花」を生物学的に特徴づける意味特徴の束の部分である。これに対して、「花」の指示対象でありシネクドキの媒体と成る「桜」を随伴的に特徴づける意味的な構成素はプロトタイプである。

認知プロセスにおける第一ステップとしては、「花」の中核概念と、プロトタイプとして「桜」を特徴づける構成素とを区別することである。「桜」のプロトタイプは顕現特性のスキーマとして表すことができる。顕現特性とは、「桜」の表す概念のプロトタイプ的に特徴づける部分を指す。第二ステップとして、「桜」の概念を表す意味特徴を「花」の中核概念に照らし合わせる。「花」の概念を表す中核概念の中で、「桜」の概念を表す意味特徴として含まれていないもの、すなわち、「『花』としての選択制限に違反している」意味特徴としては、＜草花＞である。この意味特徴は「桜」の概念を示すプロトタイプとしては合格しない。この点において選択制限の違反が認められる。また、「媒体」である「桜」の概念を支える顕現特性の部分は、文化・社会的な背景によっても左右されることも、比喩表現における「媒体」としての意味的な特徴を形成する。[21]　以上述べた「花」と「桜」の概念を形成するプロトタイプの抽出プロセスを示すと、【表　５】のようになる。[22]

【表　５】に基づいて中核概念を抽出すると、＜生物＞＜植物＞＜花＞である。中核概念と顕現特性（プロトタイプを形成する意味特徴）を表す意味的構成素とを組み合わせてプロトタイプとして認定する。「花」のプロトタイプとしては、籾山論文によって＜人目を引く＞＜植物が咲かせる＞＜美しいもの＞が提案されている。[23]これらのプロトタイプは、「花」の中核概念である＜生物＞＜植物＞＜

---

[21] J.I.Saeed　*Semantics*　Cambridge, MA: Blackwell Publishers, 1997
E.Kittay Metaphor—It's Cognitive Force and Linguistic Structure, Oxford, England: Clarendon Press,1987.　E.R.MacCormac: *A* Cognitive *Theory of Metaphor* Cambridge,MA: The MIT Press, 1985

[22] この図は、山梨正明『比喩と理解』1998 年 東京大学出版会 によるフォーマットに基づいて筆者が作成したものである。

[23] 籾山洋介「多義語の複数の意味を統括するモデルと比喩」認知言語学フォーラム用のハンドアウト資料」1998 年、東京大学、p.４。

臺灣大學學術期刊資料庫

花＞を既に含んでいる関係上、本稿では籾山論文の提案によるプロトタイプを「花」の概念を表すプロトタイプとして用いる。

【表 5】 「花」と「桜」の概念を形成するプロトタイプの抽出プロセス表

【A部】選択制限の違反の認定

（i） 花は 桜だ。

【B部】再構成 「桜」の顕現特性の「花は」への転写による「花」の概念体系を再構成する操作

（ii） a. [＋ 生物 / ＋ 植物 / ＋ 花 / ＋ 草花] b. [＋ 生物 / ＋ 植物 / ＋ 花 / － 草花]

b' [＋ 美しい / ＋ 人目をひく / － 香がいい / ＋ 短命 / ＋ 日本の代表的な花]

[| / 名詞（句）] ←（＊）→ [＋ 花見にいく / ＋ 入学式 / ＋ 桜吹雪 / ・ / ・ / | / 名詞（句）]

再解釈 （iii） （ii）を介しての「花は」に関する再解釈の過程

「花」に関する新たな視点の導入・洞察・発見 （山梨：1998、p. 20）

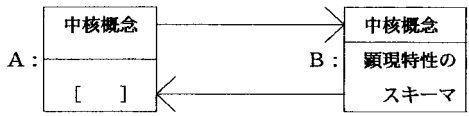
【表 5】の示す内容について説明すると、（ ）のレベルにおいては「花は」・「桜だ」という語句の間にある選択制限の違反の存在を認定する。（ ）のレベルではプロトタイプの抽出過程における意味特徴の表示、プロトタイプの選択と認定などが操作される。加えて、「桜」の顕現特性の「花は」への転写による「花」の概念体系を

臺灣大學學術期刊資料庫

再構成が操作される。(　) のプロセスとしては、(　) の顕現特性の「花は」への転写による「花」の概念体系を再構成することを介しての「花は」に関する再解釈の過程、として捉えられる。

また、再解釈とは、「花」に関する新たな視点を洞察し発見して導入するプロセスである。「桜」の概念を構成するプロトタイプとしては、籾山論文による「花」のプロトタイプ、及び、筆者によるアンケート調査から得られた結果によって抽出された、前記の「花」の意味特徴に基づいた。「桜」の意味特徴としては、「＜植物が咲かせる＞＜人目をひく美しいもの＞＜通常春咲きの＞＜香の無い＞＜散り方が派手で＞＜日本を代表する典型的なもの＞などを、表に記述した。 尚、シネクドキ表現の主題部分である「花は」をＡとして、述部である「桜」をＢとした場合、シネクドキの形成プロセスに対する規定は、次の【図　４】によって表すことができる。[24]

【図　１６】　　主題の解釈プロセス



「花は桜がいい」構文中の「花」と「桜」とは＜集合―メンバー＞という意味関係を形成しているので、＜集合＞を＜容器＞と捉えて、＜メンバー＞を＜容器の内側にあるもの、或いは容器の一部を形成するもの＞と捉えることができる。或いは、クック説の指摘に従えば、「桜」は「花によって表される概念領域への参与者」として捉えられる。どちらの説に基づくとしても、「全体」を＜容器＞に見立てることには変わらない。従って、「花は桜がいい」構文のイメージスキーマは「＜容器＞のスキーマ」として表すことが可能である。

[24] 山梨正明『比喩と理解』1998 年　東京大学出版会　p.22

臺灣大學學術期刊資料庫

次に、「花は」は＜集合＞の概念を表していて、その概念によって支配される意味領域の範囲を示しており、「桜が」を包含している領域として機能していることが分かる。既に「ＸはＹがＺ」構文中の主題「Ｘは」は「背景」を示し、「Ｙは」は「前景」を示すことは明らかにされているのでその概念も組み入れる。また、述語形容詞の「いい」が表す概念は、ここでは多義性に立ち入らずに「花という類に属している花の内では、桜が最もきれいだ」という意味を示すものとする。

（四）「花」「桜」が形成するシネクドキ及び「桜」「雪」が形成するメタファーとの係わり合い方と推論のメカニズムに対する考察

「花」と「桜」によるシネクドキと「桜」と「雪」によるメタファーとの係わり合い方には、シネクドキからメタファーへの移行が発生しているために、推論のプロセスが係わっている。その形成過程について認知意味論的な見地に基づいて考察した結果、形成の各段階における推論を伴った移行のプロセスを、【表　６】に示す。

シネクドキからメタファーへの移行プロセスは、第一に、種から類への概念的Σ型の「シネクドキ（提喩）」のプロセスによって、【白い桜の花びら→白いもの】への一般化のプロセスを経る。次に、類から種への概念的Σ型の「シネクドキ（提喩）」のプロセスによって【白いもの→雪】の特殊化のプロセスを経る。以上、「シネクドキ（提喩）」のプロセスを踏まえて、【桜（の花びら群が忙しく散る有様）―雪（吹雪）】の「メタファー（隠喩）」との関係がどのように「シネクドキ」のプロセスと係わり合いがあるかを図式化して示した。

「花吹雪」の場合は、「花」と「桜」との間にも、既に前述のように提喩関係が存在するので、「桜吹雪」の多重的意味構造の形成プロセスに、「花」と「桜」の隠喩形成のプロセスも加えなければならないことにより、「桜吹雪」の意味構造形成プロセスより複雑化する。山梨説では、構成語と指示対象を結び付ける関係を「シネクドキ（提喩）・リンク」と呼び、そのリンクを支えている全ての意義素は意味記憶内に貯えられていて、シネクドキの生成・理解の自動化、慣用

臺灣大學學術期刊資料庫

化を支えているとみなす。その意味は、我々にはシネクドキ・リンクに加えて概念を結びつける「連想リンク」があり、我々がシネクドキを形成することが出来る二項の組み合わせに出会った時に、その組み合わせは意味記憶内に貯えられるものと考えられるのである。

【表　６】　「花」「桜」から「桜吹雪」の概念形成への変化過程

（１）経験に基づいた知識として既に蓄積されているもの：

ａ．＜白い＞は＜雪＞の意味的内部構造に内包されている意味単位。

ｂ．＜吹雪＞の意味的内部構造の意味素は、＜雪＞＜白い＞＜降る＞＜冷たい＞＜寒い＞＜強風＞＜継続的＞＜冬＞などの意味単位。

（２）「白い花びら群が忙しく散るコト」

↓　【プロセス　１】（情景の視覚的認知）

白い花びら

↓　【プロセス　２】（種から類への【提喩】のプロセス

白いもの　＝一般化、意味的に見た外延的方向）

↓　【プロセス　３】（種から類への【提喩】のプロセス

＝特殊化、意味的内包的方向）

雪　↓　【プロセス　４】（[＜雪＞＜雲＞等の白いものから＜振る＞＜固体＞の意味的制限によって＜雪＞を選択]

白い花びら群が忙しく散る情景

↓【プロセス　５】（継続的な視覚的認知行為によって吹雪を連想）

吹雪　↓【プロセス　６】（「吹雪」と「白い桜の花びら群が忙しく散る有様」間に類似性を見出して、関連性により「桜

↓　が忙しく散る有様は吹雪のようだ」とする【直喩】関係を設定。

桜吹雪　【プロセス　７】　（上記の【直喩】を「桜吹雪」と名詞化させれば【隠喩】表現へと変化することになる）

――――――――――――――――――――――――――

以上の分類に基づくと、上記のメタファー表現は多重意味構造に

臺灣大學學術期刊資料庫

よって構成されていることが分かる。そして、「花」と「桜」の概念が形成する包摂的意味関係に基づいたシネクドキの意味構造、及び、それを基にして形成するメタファーの形成プロセスについては、人間の認識や知識、それらに係わる連想や推論、上位―下位関係や典型性を含む概念領域内の垂直的結合によって構成されるカテゴリ的意味の包含関係、などによって形成するシネクドキの意味的構造の中心を成す包摂関係は、現実世界に依拠しているのではなく、人間の抽象的な意味領域に依拠しているという知見を得る。

四、今後の課題

シネクドキとメトニミーの境界に対する明確な定義を継続的に探求すること、これらの比喩表現の間は、すべてではないかも知れないが意味的に連続しているものが見出せるので、どのような状況下においてそのような「連続性・不連続性」の相違が発生するのかについて解析すること、の二点を今後の課題として提起しておく。

五、まとめ

以上、シネクドキに対する異なる分類法を提起し主張する様々な理論及びその背景と主張の根拠に関して分析・考察した結果、本稿は佐藤説・楠見説による分類法に同意して、同様の立場に立つことを明確にする。そして、その観点に基づいて、本稿において認知意味論の視点からシネクドキを表現する文例のイメージスキーマを試作して図示した。 また、「花は桜だ」というシネクドキによって表示される概念が、認知プロセスを経て「花は桜吹雪だ」という新しい概念を形成してメタファー表現として派生する変化過程を、前述の佐藤説・楠見説及び認知意味論的な見地に基づいて分析・考察した結果、その変化過程を表として示した。結論として、シネクドキとメトニミーとが、或いは、シネクドキとメタファーとが、全ての意味関係ではないかも知れないとしても、意味的に連続している可能性があるものも見出せた点を指摘し、まとめとする。

臺灣大學學術期刊資料庫

参考文献

楠見 孝(1995)『比喩の処理過程と意味構造』風間書房、p.170-p.206。
国広哲弥（1992）『意味論の方法』大修館書店。
佐藤信夫（1978）『レトリック感覚』講談社学術文庫、p.183-p.192。
芝原宏治（1995）『錯誤の意味論』海鳴社、p.110-p.115。
謝豊地正枝（2003）『「X は Y が＋述語形容詞」構文の認知論的意味分析―「花は桜がいい」構文の意味分析を中心に』凱侖出版社。
杉本孝司（1998）『意味論 2―認知意味論』くろしお出版。
瀬戸賢一（1997）『認識のレトリック』海鳴社、p.194－p.201。
中村　明（1952）『比喩表現の理論と分類』国立国語研究所、p.33。
町田健・籾山洋介（2002）『認知意味論のしくみ』研究社。
籾山洋介（1998）「多義語の複数の意味を統括するモデルと比喩」認知言語学フォーラム用のハンドアウト資料」東京大学、p.４。
山梨正明（1992）『推論と照応』くろしお出版。
―――（1995）『認知文法論』ひつじ書房、p.95－p.96。
―――（1998）『比喩と理解』東京大学出版会。

翻訳書

グループLL（1996）『一般修辞学』大修館書店、p.195。
R.ヤコーブソン（1973）『一般言語学』川本茂雄ら訳、みすず書房、p.210、p.221-p.222。
G.レイコフ（1988）『認知意味論』池上嘉彦ら訳、紀伊国屋書店、増補版 p.331-p.355。
G. レイコフ・M.ジョンソン（1999）『レトリックと人生』増補版、渡辺昇一ら訳、大修館書店、p.91-p.108。

臺灣大學學術期刊資料庫

外国文献

Cooper、David（1986） *Metaphor: Aristotelian Society Vol.5,* Oxford, England: Basil Blackwell, p.118-p.127.

Cook、Haruko（1993） “Schematic Values of the Japanese Nominal Particles WA and GA” in R.A.Geiger & B.Rudka－Ostyn eds., *Topics in Cognitive Linguistics*, p.371-p.397.

Kittay、E.（1987）*Metaphor—Its Cognitive Force and Linguistic Structure,* Oxford, England: Clarendon Press,

Johnson、Mark（1987） *The Body in Mind－The bodily basis of Meaning Imagination, and Reason* Chicago: Chicago University Press, p.21.

Rumelhandt、D.（1989）“Notes on a Schema for Stories” A.M.Collins, eds. *Representation and Understanding: Studies in Cognitive Science* New York: New York Academic Press, p.211-p.236.

MacCormac、Earl R.（1985）*A* Cognitive *Theory of Metaphor* Cambridge,MA: The MIT Press.

Saeed, John I.（1997）*Semantics* Cambridge, MA: Blackwell Publishers.

臺灣大學學術期刊資料庫